
写身—うつせみ—

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

写身―うつせみ―

【Nコード】

N5185F

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

鏡に写っているのは私じゃない。一度生まれた疑問は頭から離れる事無く留まり続ける。ある日の深夜にそれを確かめるべく鏡の前に座る。

鏡に映る自分が嫌だ。

別に容姿にコンプレックスを抱いてるわけじゃない。ただ……そこに写っているのが私とは思えないから。

だけど鏡には私の姿が写ってる。けど、それは私じゃない。私は……ここにいるから。

だから、そこに居るのは……私じゃない。

中学校に入った時に祖母がドレスサーを買ってくれた。女の子だから必要でしょと言って。

年頃の私は随分と喜んだ事を覚えてる。これからは私専用の鏡に私だけを写し、独占しながらいろいろな事が出来ると思っただけで心躍った。

だから意味も無く鏡の前に座って幾つもの化粧品を試しながらやり方を覚えたり、髪もいろいろな風にセットしてみた。

楽しかった事を覚えてる。

着飾って化粧をして、鏡に写った私は別人のようだった。うっん、まるで別な人になったような気がした。

テレビに映っている女優にも負けないぐらい綺麗で、このまま出かければ男の人はおろかスカウトまでされるのではないかと妄想以上に期待をした事もあった。

実際にナンパされた事もあり、私はドンドンと自分を磨き続ける事にハマっていった。

そして自分でも満足が行く最高の私が鏡に写った時に思った。

これは……私なの？

確かに鏡に写っているのは私……のはず。でも、それはどうやって証明するの？

友達にも、はたまた著名な学者でも鏡に写った私は間違いなく自身の姿だと言っだろう。それは常識だし、当たり前的事だ。

でも……それは私では無いような気がしてきた。

一度生まれた疑問は私の頭から離れる事は無かった。

鏡に写っているのは私じゃない。なら……あれは誰？

取るに足らない疑問と自分に言い聞かせて頭の中から追い出そうとする。けど、鏡に姿を写す度に問いかけてしまう。

あなたは誰？

一度だけ、友達に相談した事がある。もちろん少しだけ言葉を変えて、思っている事をそのまま相談しては私が変わたと思われるのが嫌だったから。

「ねえ、鏡に写った自分ってどう思う？」

「どうしたの、いきなり？」

「うん、皆はどう思ってるのかなって思って」

不安だった。そんな事を感じているのは私だけだと思ってたから。けど……意外な答えが返ってきた。

「そうね、なんか変な顔をしてるな、って」

「鏡を見るたびにこれは私じゃないって思うのよね」

「ああ、そうそう、本当の私はそんなんじゃないって」

心のどこかでほっとしたのを感じた。

鏡に写った自分に違和感を感じてたのは私だけじゃない。そう理解すると何ともいえない開放感が私を包み込む。

やっぱり友達にはいろいろな話を話してみるね、そう感じてる
きだった。

「だからメイクが上手く行くと、これが本当の私！　って思わない
？」

「思う思う、やっと本来の私を取り戻したみたいな」

「あんたはノーメイクじゃ歩けないからね」

「そうそう、ってどういう意味よ！」

友達の笑い声が溢れる中で私一人だけが呆然としていた。

……違う、そうじゃない。あそこに写っているのは私じゃない、
本当の私なんて写りはしない。あそこの写ってるのは……。

休み時間の終わりを告げるチャイムに気付かなかった私は、友達
に揺り起こされるまで呆然としていた。

ある日の深夜。目を覚ました私は用を済まして自分の部屋に戻っ
てきた。そのままベットに潜り込もうとしたのだけど、誰かが私を
見ているような気がして恐る恐る振り返る。

そこには鏡に写った私のようなものが私と同じ格好をしている。
鏡から視線を感じるはずが無い。だけど……私はしっかりと鏡か
らの視線を感じている。

正直に言うとうんざりしていた。なんで鏡にこんなにも振り回さ
れないといけないのかと、そう思っただけで腹立たしくなった。

だから私は意を決して鏡の前に座る。

鏡に右手を付けて、視線を合わせてゆっくりと口を開く。

「あなたは誰？」

馬鹿げてると思った。こんな事をしても答えなど返ってくるはず
が無い。

私は目を閉じてゆっくりと溜息を付くと右手を鏡から離そうとす
る。

「んっ？」

離れない右手に私は目を開いて驚愕した。私の右手と鏡に写っている私の姿をした左手がしっかりと繋がれていた。

手が鏡の中に入ったり、出てきたりしているわけじゃない。壁に描かれた絵と手を繋ぐ、そんな感じだ。繋がってないのに繋がってる、離れたいのに離れない。

そんな状況に私がもがいていると鏡の中に居る私の姿はゆっくりと口を開いた。

『あなたは私、私はあなた』

「えっ？」

突然話し始めた鏡の中に居る私の姿にもがく事を忘れて凝視してしまった。

『だからまったくの別人。全てが同じ人なんて何処にも居ないからだから私とあなたはまったく別の人、でも同じ』

「なっ、なにを……」

言ってるの？ と最後まで言えなかった。足はすくんで動かないし、声すらまともに出ない。ただ出来る事は……鏡に写っている私のような姿をじつと見詰めるだけ。

『あなたは問いかけた。その問い掛けは摂理であり禁断。忘れ去られた理であり、犯してはならない禁忌。だからあなたに罪は無い、あるのは因果応報』

「いんが？」

ワケが分らない。鏡の中に居るそれは何が言いたいのか、まったく分らなかった。

そもそも何故私はこのような目に遭っているのだろうか。私は摂理も禁断も知らないし、罪を犯した覚えも無い。それなのに因果あるなどと言われる筋合いは無い。

そのうえ私と同じ姿をしているそれがワケの分らない事を言ってくる。そう考えがまとまった時点で凄く怒りたくなり、私の心から怒りが顔を覗かせる。

「あなたね！ 言いたい事があるならハッキリと言いなさいよ！

そもそもあんた誰？」

当然の疑問だと思う。鏡に写っているそれは私じゃないとハッキリ言っている。それなら誰という疑問が生まれても不思議は無いだろう。

鏡の向こうにいるそれを睨みつけながら私は答えを待った。それは少しだけ沈黙を置くとゆつくりと語りかけてきた。

『私は未完成、だから完成する事を願う。あなたと私は同じ、それは同じものがあるから。あなたと私は別、それはあなたが持っているものを持ってないから』

「完成って？」

『あなたは写した、ここに。綺麗になりたいと、楽しいと、もっと見てもらいたいと。だから私も同じ事を願う。あなたはまだ写していない。だから私は望む、あなたの全てが写るのを』

ゆつくりと言い終えた鏡の向こうに居るそれ。私はその言葉を聞いた後に耐え切れないほどの恐怖を感じた。

「いやあああああああああああああああああ
！」

悲鳴を上げた事すら分ってない。少しでも早くその鏡から離れたかった。そのまま写していると全てを持っていかれるような気がして、それが途方も無い恐怖として私に襲い掛かってきた。

「離して！ 離してよ！」

鏡から必至に右手を離そうとする私を逃さないつもりなのだろうか、掴む指が私の手に力強く食い込む。

それでも足掻き続ける。もう手が干切れてしまいそうなほど痛かったけど、そのまま鏡の前に居るよりは何倍もマシだった。

暴れ続ける私は少しずつ疲れてきて、抵抗する力すら奪われてるようだった。

そんな時に目に映ったのが先程まで座っていた椅子。

左手で軽い椅子を掴むと鏡に叩きつける。大きな音が響き渡り、やっと解放された右手のおかげで私は後ろに倒れこんで、鏡は粉々

に砕け散った。

床に散らばった鏡の破片を見ながら、やっと私は理解した。
鏡に写していたのは……私だと。

（後書き）

そんな訳でお送りしました写身―うつせみ―はいかがでしたでしょうか。楽しんでもらえたなら幸いです。

さてさて、ここで一つお願いが……。本編の主人公は少し自意識過剰なところがありますが……。そこは大目に見ましようよ。

あははっ、ほら、人間は心が狭くなったら終わりですよ。少しぐらいの失敗や矛盾などは許してあげましようよ。

……えっ、ダメ。

説得失敗した――っ！！！！

さてさて、戯言も終わったところでそろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございます。そして他作品もよろしく願います。

以上、だんだんと集中力が衰えてくる葵夢幻でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5185f/>

写身—うつせみ—

2010年10月8日16時00分発行